

● 設立2周年記念シンポジウムの概要

○ 日時 2007年2月25日(日)

午後1:30～4:00(開場:午後1:00)

○ 会場 広島YMCA国際文化ホール
〒730-8523 広島市中区八丁堀7-11
TEL(082)227-6816

○ プログラム

基調講演

がん情報の入手法と賢い利用法
的場 元弘(がん対策情報センター)

シンポジウム

1. 患者が求めるがん情報とは
中川久美子(がん経験者)
2. メディアをうまく活用しよう
伊藤一亘(中国新聞社文化部記者 がん経験者)
3. 地域がん診療連携拠点病院の取り組み
浅原利正(広島大学病院長)

○ 入場料 無料

○ 主催 NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま

○ 後援 広島県医師会、広島市医師会、広島県看護協会、広島がん治療研究会
(財)広島がんセミナー、中国新聞社、NHK広島放送局、中国放送、広島テレビ
広島ホームテレビ、テレビ新広島

○ 協力 ウィメンズキャンサーサポート、緩和ケアを考える会・広島、きらら、生と死を考える会・広島、乳腺疾患患者の会・のぞみの会、広島・ホスピスケアをすすめる会、びわの葉会

がん110番
設立2周年記念シンポジウム
がん情報の「入手法」と「賢い利用法」
がんの予防や治療など、がん医療に関する信頼できる情報をどのように入手し、どのように利用すればいいでしょうか？
がん対策情報の発信源である国立がんセンターの的場先生の基調講演と、がん経験者を含む各シンポジストの講演を聞いたあとで、参加者も交えた意見交換をします。がん患者さんやそのご家族だけでなく、一般市民の皆さんのご参加もお待ちしております。

2007年2月25日(日) 入場無料 正午300名
午後1:30～午後4:00(開場:午後1:00)
広島YMCA国際文化ホール
広島市中区八丁堀7-11 広島YMCAホール(本館地下)
TEL:082-227-6816

がん情報の「入手法」と「賢い利用法」 的場 元弘 国立がんセンターがん対策情報センター

シンポジウム
患者が求めるがん情報とは メディアをうまく活用しよう 地域がん拠点病院の取り組み
中川 久美子 がん経験者 伊藤 一亘 中国新聞社文化部記者 浅原 利正 広島大学病院 院長

コーディネーター
廣川 裕 中国新聞社文化部記者

二人一組が「がん」に悩む替代者。がんに関する情報をどのように入手して活用するか、レクチャー致します。

後援/広島県医師会、広島市医師会、広島県看護協会、広島がん治療研究会、(財)広島がんセミナー、中国新聞社、NHK広島放送局、中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島
協/ウィメンズキャンサーサポート、緩和ケアを考える会・広島、きらら、生と死を考える会・広島、乳腺疾患患者の会・のぞみの会、広島・ホスピスケアをすすめる会、びわの葉会

主催 NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま TEL & FAX 082-249-1033
E-mail: info@gn110.jp
http://www.gn110.jp

● 11月25日がん講座後の「懇話会」の報告

皆さん、明けましておめでとうございます。

本年度第4回目の勉強会(市民のためのがん講座)の後で、約1時間の時間を「懇話会」を行いました。講師の広島病院の山口佳之先生を始め、理事長、理事の先生方が4テーブルに分かれ(60人余り)、患者の方、家族の方、その他の方など色々な話が出て大変盛り上がりしました。白衣を脱いだ先生方は、とても身近に思えて、聴講生の方々と一歩近づけたように思いました。

いつも100人ほどの聴講生が集まる勉強会で、挙手をして発言するのは中々勇気がいるという声の中、少人数なら話しやすいだろうと企画した懇話会でした。気楽な雰囲気をと、ウーロン茶とどら焼きを準備しましたが、心配するまでもなく、どのグループでも結構活発にいろいろな発言が飛び交っていました。話したい、聞いてもらいたい、という皆さんの気持ちがビシビシと伝わって来ました。

一つ一つの話に真剣に答えてくださる先生たちのお話、輪の仲間も大変勉強になったと思いました。帰路に急がれる皆さんの背中が「明るいね」という、スタッフの声に、「あー、良かったー。」

懇話会に欠席された方、次回もまた皆さんと一緒に勉強して参りましょう。優しい空気が流れていて、とても心地よかったです。

最後まで輪の中に居てくださった先生方、進行係り、書記のスタッフの皆さん、本当にお疲れ様でした。

事務局 吉本 千鳥

●「懇話会」の感想

11月25日の「懇話会」は意義深いものと思いましたがさらに発展させながら継続していただきたいと思っている者です。つきましては「薄識」ではありますが、私見を申し上げてみたいと思います。

多くの方々に参加していただくためには、罹患部位にかかわらず全ての患者、そして家族、お医者さんが共通して関心をもてる話題をテーマにすることが肝要かと思えます。例えば、がん宣告を受けた時ショックと混乱の渦に巻き込まれながらも、病院は、主治医は、そして治療方針はこれでいいのか？と考えなければいけないと思えます。

11月25日の「懇話会」のときも少し口端に出ていましたが、「すべて先生にお任せします」との考えの方も少なくないと思われます。

運悪く再発した時はもっと深刻な問題と考えます。こうした共通の問題をテーマにし事柄によってはケーススタディで問題提起し気楽に意見を述べていただくのもいいのではないのでしょうか？

またがん患者もその家族も、精神的苦労は並々ならぬものがあると思えます。

それを少しでも緩和するにはどんなことが考えられるのか？人様々であろうと思えますが、どんな経験をお持ちなのかも共通の大きな問題と考えますが？

そのほかにも様々な事柄があると思えますが、問題によってはテーマを二つにしてもいいとも考えます。「懇話会」の継続を含めてニュースレター紙上などで会員の皆さんのご意見を聞いてみたらいかかかと思えます。

ただお世話をいただく方々の負担がますます重くなる事柄ですゆえ、心苦しくも思いながら提案いたします。また継続していただけるならソフトな感じにするため「茶話会」など、いかがでしょうか。

会員 深井 昇

● Dr. 津谷の「癌予防ガイドライン（2）」がん予防、まずはタバコ対策から

がんの原因は、何でしょうか？

食事、タバコ、遺伝、環境汚染、ストレス、肥満、・・・、統計学的にはいろいろ言われていますが、この中で一番がんの原因として影響が大きいものはなんでしょう？

この質問で、多くの方は食事と答えます。

現実には、がんの原因の30%は、タバコによると言われてます。言い換えれば、もしもこの世にタバコが存在しなければ、それだけでがんになる人の数が3割は減ります。世界的に権威のある科学雑誌“ネイチャー”の2001年5月号にがんの要因別寄与率が発表されました。これによると喫煙者と非喫煙者により要因は大きく違ってきますが、特に喫煙者では予防可能ながんは全体の約75%であり、そのうちの60%はタバコが原因であるとしています。そして“がん予防をのぞむ喫煙者が、喫煙以外の要因に頭を悩ませているのは、馬鹿げたこと”と結論づけています。



この科学的な事実にもかかわらず、タバコより食事に神経質になっている日本人があまりにも多いのです。その理由の一番は、マスメディアによる報道の偏り（情報操作？）でしょう。マスメディアががん予防を話題にするときは、食事や栄養素の効果を上げることがあっても、直接タバコの害を正面から取り上げることはありません。

つい先日もある週刊誌に大々的に受動喫煙の有害性を否定した特集記事が掲載されました。内容は「定説『健康に悪影響は嘘!?!』』という見出しで、世界保健機関(WHO) 附属機関の国際がん研究機関(IARC)とカリフォルニア州立大学の研究チームが調査した「大規模疫学調査結果」をあげて、「成人同士の受動喫煙の影響はなく、肺がんの発がん率を高めない」。そればかりか、「両親がヘビースモーカーの場合でも、子供時代の受動喫煙は肺がんの発がん率を低下させる」のだという記事でした。

内容の真偽や詳細に関しては、下記のインターネット・サイトでご確認ください。

日本禁煙学会 <http://www.nosmoke55.jp/>

日本呼吸器学会 <http://www.jrs.or.jp/index.html>

小説家川端裕人氏のブログ

http://ttchopper.blog.ocn.ne.jp/leviathan/2006/11/post_7915.html

社会をミスリードしてしまう内容が、堂々と新聞広告や電車の中吊り広告などに掲載されました。マスコミや巨大産業が後ろに控えている中、日本の社会ではっきりと“タバコはダメ!”と主張していく義務が私たちにはあるのです。次世代の子供たちに、より健やかな社会と生活を提供するために。

今回は、タバコをやめたいのにやめられない方のためのお話です。

副理事長 津谷隆史

●「がん患者さんの痛みあれこれ」 でも今回はがんでない人の痛みについて

いきなり私事ですが、昨年末に広島市中区小網町に「痛みのクリニック」を開業しました。今までも総合病院で痛みの外来を担当していましたが、その延長線上で考えていましたが、蓋を開けてびっくり。世の中には、かくもたくさん「痛い人」がいらっしゃるのだわ、と驚愕しました。

中でも特に多いのが、「膝の痛い中高年女性」。小太り（失礼！）の方は、体重が膝にかかるため、膝の関節に負担が大きく、骨や軟骨が変形して痛みが生じます。年を重ねる毎に症状は強くなりますが、我慢しているうちにいつの間にか高齢となり、手術に踏み切る元気がなくなってしまう。

体重が少なくなれば当然膝への負担は軽くなり、痛みの軽減につながります。でも現実には、「私はもうこんな年になり、あとどれくらい生きられるか分からない。食べたいものは思う存分に食べて、思い残しのないようにしたい。」・・・ごもつとも。

じゃあ、筋肉を鍛えてやれば、関節をカバーしてくれるからいいですよ。でも現実には「運動しろと整形外科の先生も言うけど、それが出来るんならこんなになっていません。今までスポーツなんかしたことないのに、毎日プールに通うなんて、できるわけじゃないじゃないですか」・・・ごもつとも。

かくして、自分の非力を思い知らされながら、日々患者さんとお話ししています。「ここに来ると、痛みを分かってくれる仲間ができて嬉しい」「先生と話しをすると気分が変わって明るくなれる」と言っただけなのがせめてもの救いです。

「冷やさない」「休憩しながら動く」「弱めの痛み止め」を合い言葉に、日々診療にいそしんでおります。

理事 藤本真弓

●「ウソのような本当の話」

ニュースレターの第18号で、私のがん体験からセカンド・オピニオンの難しさについて触れましたが、今回はその続きです。

がん相談を受けているといろいろなケースに遭遇することあります。

会員のM.Nさん（女性59歳）からメールと電話で相談を受けました。M.Nさんは肺がんであることが判った時にも広川先生のセカンド・オピニオン受け、納得して全摘手術をされました。その半年後、主治医から「転移」の疑いがあると言われ相談を受けました。

病歴を聞いたあと、まず主治医の説明をよく聴き、不審点は質問するようにアドバイスしました。しばらく連絡が入らないと思っていたら、経緯をまとめたメールが届きました。

『転移？診断（11/22）2週間後（12/6）の通院日、質問事項を考えて、いつもの病院へ行きました。娘が同行。「転移かどうか、まだはっきりしないので、2月のCT検査まで現在の治療を続ける。もし転移なら呼吸器内科で抗癌剤治療ということになる。抗癌剤治療が嫌なら、痛みを緩和しながら最後？を迎える。まだ断定したわけじゃないんだから！」と、この日は画像を見ることも無く主治医が説明してくれました。

このまま不安を抱え時間を待つだけというのは、ますます不安が増すだけだと思い、2日後広川先生を訪ねました。先生は快く診てくださり、コメントするには画像を見なければできないので、と依頼状を書いて下さいました。

翌日それを持って主治医を訪ねました。

Dr.の第一声が「失礼じゃないか。私の診断を疑っていると言うこと、じゃそちらに行ってくれ、私はもう診ないから、好きなようにどうぞ」という内容の激怒のことば。予想もしなかったことばに、ショック！「そういう積もりはなく、命がかかっているのだから困る、これからも診てほしい」と、言う他ありませんでした。Dr.への腹立ちより情けない気持ち強く、これからもこの人に自分の命を預けるのかと思うと不安が先にたちました。まさかの言葉！

CTを持って、12/15また広川先生を訪ねました。入室するなり、「上手に言えましたか？」と。きっと予想されていたのでしょう。最後に話すつもりが、最初になってしまいました。

「Dr.の踏絵、本性が現われるんですよ。この画像からは転移は無いと思われそうですよ。」まさに神の声？嬉しかったです。今はわざと下手に出て、次の大きな決断時に転院を含めて考えるということにしました。広川先生はきちんと返信まで書いて下さいました。こんなに素晴らしい先生に巡り合えたのも貴会に入会したお陰です。本当に感謝します。言葉では現せません。

ありがとうございました。』（このメールはM.Nさんの了解のもとで公開させていただきました。）

この会話はフィクションではありません。今日もどこかの病院で交わされている会話かも知れません。私たちは主治医からのきつい言葉にも耐えて治療を続けなければいけないのでしょうか。

CTやMRIなどの資料は医師のものでも、病院のモノでもありません。患者



さん自身のものです。必要なときに堂々と自分の意見が言えるような患者になっていただきたいというのが私たちの願いです。

当会では「患者さんとご家族のための情報源になる」ことを中心に、がん患者さんの立場に立って、医師と病院と患者のすき間を埋めることを目標に活動しています。

患者は医師と対等に会話が出来る医療知識を持っていることが理想です。それは深くなくても、基本的な知識で十分です。

当会では2ヶ月に1回開講している「市民のためのがん講座」(次回は1/27)があり、来月25日にはシンポジウム「がん情報の入手法と賢い利用法」を開催します。この機会に一人でも多くの方が参加して、勉強して下さることを願っています。

理事 高野 亨

●シリーズがん療養生活の基礎知識 A to Z

在宅医のごあいさつ

新年明けましておめでとうございます。

今年も、NPO法人がん患者支援ネットワークひろしまの活動を通じ、少しでも皆さま方のお力添えになれるよう微力ながら尽力していく所存です。

引き続き、当NPOをご支援賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

理事 田村裕幸

● 会員からの投稿原稿

当会の副理事長の井上さんから、体験談をお寄せ頂きました。

「がんについての雑感」

想いおこしてみると私は、五年前の今頃の日曜日の夕刻、突然の鼻からの出血、それが止まらずに、近くの救急病院に行くも、ここではどうしようもないと断られ、困り果てていると、看護師さんが、廣大耳鼻科の当直の電話番号を教えてくださいました。電話してみると対応いただけるということで、早速駆けつけた。

そこでは、応急の止血処置をしてくれて、鼻の奥に腫瘍があるので、月曜日にかかりつけのお医者さんに行くようにという指示を受けた、翌日指示通りに通院した。周期的の襲ってくる痛みもだんだん激しくなってきた、そのまま検査入院となった。薬で痛みを和らげながら検査結果を待っていたが、ようやく結果が出たときには、廣大を紹介し、とだけ言われて、紹介状をもらって廣大に逆戻り。ここで耳鼻科と放射線科による、4ヶ月近くに亘る抗がん剤と放射線による治療が始まった。

放射線治療のある日、突然広川先生(現理事長)に英語の3枚程度の資料を手渡され、次回の診断までにこの資料に基づいて、がんの進行程度を自己診断してきてくださいと言われて診断した。私の見立ては初期の軽度のがんだったが、これは大ハズレ、中期のきわどい段階まで進行しているという先生の診断だった。この資料を見ていて、このがんの予兆として、耳鳴り、難聴、鼓膜の圧迫感などが記してあった。私にも、同じ症状が二年前からあり、耳の検査は継続的に行なわれたが、上咽喉の検査はなかった。鼻血がなければ、更に発見が遅れて、今、生存は叶わなかったかもしれない。

幸い薬効あって、現時点まで再発の心配はないという状態が続いているが、その間に、多くのがん患者の方とめぐり合った。自分の兄、姉、姪、会社の先輩、会社の同僚、社員のお子さん、お孫さんなど、がんの種類も、胃がん、咽喉がん、卵巣がん、肺がん、血液のがんなど種々雑多である。この中には、すでに亡くなられた方も何人かいらっしゃる。

自分なりに分析してみると、がん治療の成否は、やはり一般に言われているように、がんの種類ではなくて、早期発見にかかっているように思える。

また、亡くなった方のケースの多くは、ご本人は体の異変に気がついて1～2年の間、病院を転々と回っていられる。そして、がんであると認められた時には、もう手遅れで、転移が進んでいるというケースばかりである。

私は、広川理事長の推薦で、広島県の「がん対策推進協議会」の患者代表委員として「がん患者支援ネットワークひろしま」を代表して参画することになった。この協議会の設立目的は、「予防から検診、治療、緩和ケアにいたるまでがん対策を総合的に推進し県民の健康保持、増進及び医療水準の向上に資することである。」と記されている。

この協議会でも、会員の皆さまのご意見を反映してゆきたいと思っている。忌憚のないご意見をお寄せください。

副理事長 井上 等

●広島県内のがん関係イベント情報

○平成18年度第5回「市民のためのがん講座（全6回シリーズ）」

テーマ：「肺がんの縮小手術」妹尾紀具（広島市民病院呼吸器外科部長）

「肺がんの転移について」廣川裕（当会理事長）

日時：2007年1月27日（土）午後2時～4時15分

場所：中区地域福祉センター 5階大会議室

受講料：当会会員：800円、協力団体会員：1,100円、一般：1,300円

主催：NPO法人がん患者支援ネットワークひろしま

○「第回緩和ケアを考える会・広島 事例定例研究会」

テーマ：「緩和ケアに必要なサイコオンコロジーの基礎知識」

～心という治癒力のサポート～

講師：佐伯俊成（広島大学病院総合診療科助教授、

NPO法人がん患者支援ネットワークひろしま理事）

日時：2007年2月24日（土）午後2時～4時半

場所：国際会議場「ダリア」

連絡先：緩和ケアを考える会・広島事務局（TEL：082-545-3140）

○「第40回緩和ケアを考える会・広島 事例検討会」

テーマ：「未定」

日時：2007年3月10日（土）午後2時～4時

場所：県立広島病院・緩和ケア支援センター2階（TEL：082-252-6262）

事例提示：

連絡先：緩和ケアを考える会・広島事務局（TEL：082-545-3140）

○平成18年度第6回「市民のためのがん講座」

テーマ：「婦人科がんの化学療法の進歩」藤原久也（広島大学病院産婦人科講師）

「子宮がんの画像診断」廣川裕（当会理事長）

日時：2006年3月24日（土）午後2時～4時15分

場所：中区地域福祉センター 5階大会議室

連絡先：事務局（TEL/FAX 082-289-0610 E-mail：info@gan110.rgn.jp）



●編集後記

明けましておめでとうございます。皆さまはどんなお正月を過ごされたでしょうか。家でのんびりと何にもせずに、という過ごし方に心地よいものを感じ、それなりに年を重ねた自分に気づきます（笑）。

ニュースレター第20号をお届けしました。がん患者支援ネットワークひろしまは、今年も皆さまと共に歩んでいけるNPOを目指していきます。昨年同様、暖かい支援をお願い致します。

2月には、各界の代表的な方々をお招きして、情報収集についてのシンポジウムを予定しています。多数のご参加をお待ちしております。（ま）

-
- 発行： NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま 事務局
<http://www.gan110.rgn.jp>
 - お問い合わせ： info@gan110.rgn.jp
TEL & FAX：082-249-1033
 - Copyright： NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま

このニュースレターは、当会の会員に配付しております。
当会の活動を充実させるため、入会希望者のご紹介をお願いします。
